

## メイストームの約束

メイストームの季節には

個人的感慨を語ってみるとしよう

あなたは決して一人じゃないと

どこかで聞いたことがあるから

たとえば

ひと月後にある告知を待つ患者

ふりむくと あなたがいなくなっている

わたしという限られたこの世の空から発する心情は

あなたともうちよつと生きていたいということか

人生の途上に再びあなたという奇跡を見出したのだから

五月の嵐はすぐそこまで迫り

空と切り離されたとき 稲妻が光る

残光にあなたとの誓いを 空の冥さに光る一瞬の約束を

わたしは微かに思い出した

暗雲立ち込め八方塞がりの空は そのままわたしの見た世界で

その冥い空は無言のうちに何かを訴えているのか

寡黙さ故に 灰色の沈黙故に こんなにも強いのか

人の誓いは 約束は いっだって時の風が動くとき 破られてしまうものだと

願うことをやめ 祈ることを忘れ

何かが横滑りしてきてふたりを引き裂くのだと

怖さよりもさびしさが 五月の嵐にはあるような気がしたから  
花の季節はもうすぐで 鮮やかな緑はきつとまぶしいのだろう  
その前で渦巻く時間の嵐の中に わたしは誰の名を呼ぼうか

やがて細かい運命の時が絡み 風が 雨が激しくなつて  
雷雨の音が一層からだの中で ことさらに大きくなったとき  
光の粒子が天空に舞ったとき わたしは長い一瞬の光を  
遠く離れた人と 行方知らずの人と  
同じ空を 暗雲を 稲光を見ていたのではないのか

心配しなくていいと これからのことをふたりで考えようと  
あなたは言うがわたしの空は愛の影で曇つた  
もしも落雷に打たれたのなら それは永遠への入り口だ 脱出成功だと  
あなたは青年のように言ったことがあつた  
わたしはふと生きている不安ごときまでもが ノスタルジックでそのことが怖かつた

雷雨が走る メイストームの到来  
空が 風が そして時間までもが洗われて  
すべては一層鮮やかに ちやうど天空を描いた画布のように 光が生まれ  
五月の嵐の跡は 太古から未来までをいつきに流れ  
そうしてふたりは 永遠の記憶のうちに 光速で描かれるのか

やがて嵐が去つたならば  
わたしはそのときこの空に  
何を見る のかしら

## 春を待たずに

春を待たずに

あなたのもとへきつとゆく

わたしはいつだってそのつもりだった

最も愛したひとへエンディングメッセージを

そんなメールの記号を読みとり宛てのないノートを書いている

それは発信することの決してない言葉 ノスタルジア

わたしはあなたに値しなかったのね……

長いノートの空白があなたの不在の歳月が わたしを本当に疲れさせた

そしてこの長い空白に北風が吹き寄せ 失意と苦悩の頁を開いた

ようやくとあなたへの愛に値すると わたしはそう感じた

凍えてしまったわたしを 一瞬で温めてくれたようなあなたのメール

わたしの心は記号じゃないから どこを開いてもあなたへの愛であふれているのに

本当はリアルタイムで描けるのに……

もしも もしもよ

一瞬でもあなたの頁にわたしがいたら

嬉しくて涙の熱さで すべてが溶けてしまうでしょうに

そう あれは透きとおった若い時代

その白さに固さに 誰にも触れさせやしないと フリーズドした世界

氷を蹴って刻む音を 今もわたしは胸に聞く

かつてわたしのかわりに死んでくれたひとがいたような

ある衝撃の時代にあなたと出会った

自覚しなかった愛の大きさを豊さを理解し 遺されたわたしの生を励ましたあなた

凍ってゆきながら氷を削るように わたしはあなたを想い出す

今度はわたしがかわりに死んでもいいのだと思った 唯一のひと

この越冬の地から旅立つとき わたしはもはや何の痕跡も残しやしない  
あなたを思うところ以外は何も残しやしない

炎でさえ氷を溶かすのに わたしは愛を閉じ込めよう

言いようのない痛みとともに あなたを長いこと待った 宛てもないのに待った

長い月日を 雪融けの季節を待つように

このノートが春へと向かうものと どこかでたかをくくっていたから

毎日があなたの不在の日になると

最期に伝える言葉が生まれた

こんなにもまっすぐにこんなにも深く

ひとを想ったことは無かったような気がする

たとえ残された季節があとわずかでも

そのすべての時間を

あなただけを見つめ あなただけをこころに刻んでも 惜しくはないわ

なんだからもうノートを閉じて

春を待たずにわたしは……

そんな予感がするのよ